

Bem(2011)に対するいく 2 つの疑義

坂根 照文 (Terufumi SAKANE)

愛媛大学法文学部心理学研究室

ヒトには予知能力がある旨を述べた D. J. Bem の論文が、2011 年に *Journal of Personality and Social Psychology* に掲載された。論文の題目は *Feeling the Future: Experimental Evidence for Anomalous Retroactive Influences on Cognition and Affect* である。論文には 9 の実験が報告されている。Cornell 大学の男女の学部学生が実験に参加し、参加者の延べ人数は 1050 名であった。9 の実験をすべてここで紹介するのは煩雑であり、100 名の参加者を用いた第 1 実験の要点を簡潔に紹介しよう。

第 1 実験では、左右 2 つの枠が提示されているコンピュータ画面の前に着席した参加者に、特定の図形が、2 つの枠のどちらに隠されているかではなく、左右のどちらに提示されるかを予知させた。提示図形は"erotic picture"、"nonerotic picture"、"negative picture"、及び"neutral picture" が用意された。どの図形が提示されるか、および左右どちらに提示されるかはコンピュータ・プログラムにより無作為に決められたが、各試行で、参加者が左右のどちらに図形が提示されるかを予知した後に、どの図形が左右どちらに提示されるかの決定がされた。

実験の結果、他の図形と比較して、"erotic picture"だけが 53.1%で提示が予知された。予知率 53.1%は、偶然である 50.0%とは t 検定により有意に違いがあり、ヒトの予知能力の証拠であると Bem は主張した。

筆者の経験では、記憶や知覚などヒトの認知に関わる心理学実験での参加者数は 20 名前後、多い場合でも 30 名程度である。一般に、2 つの平均値の差は、それぞれの平均値が算出された標本数が増加するについて、統計的に有意に近づく(橋, 1986)。1 つの実験に 100 名の参加者を用いた点について、論文中で Bem は参加者数について断ってはいるものの、それだけの標本数を以てして、統計的に有意な水準にやっと達する事ができたのではないかとの印象が強い。因みに各実験での参加者数は、実験 2 は 150 名、以下順に 100 名、100 名、100 名、150 名、200 名、100 名であり、実験 9 は 50 名であった。

もう 1 つの疑問は、Bem が論文を *Journal of Personality and Social Psychology* に投稿した点である。Bem は自己知覚理論 "self-perception theory" により著名な社会心理学者である。社会心理学分野の研究ではない、ヒトにある種の予知能力についての論文を、社会心理学分野の上記の雑誌になぜ投稿したのか？

アメリカ心理学会は多数の学術雑誌を刊行している。その中で、ヒトの認知についての論文は *Journal of Experimental Psychology: General*, *Journal of Experimental Psychology: Human Perception and Performance*, *Journal of Experimental Psychology: Learning, Memory, and Cognition*, あるいは *Journal of Experimental*

Psychology: Applied に掲載されるのが通常である。この 4 誌の 1 つに Bem は当の論文をなぜ投稿しなかったのか？ 4 誌のどれかに投稿しても採択される可能性が極めて低い、あるいは採択されないと **予知していた**のではないかしら？

参考文献

橘 敏明 (1986) 医学・教育学・心理学にみられる統計的検定の誤用と弊害 医療図書出版社.